

短期大学におけるポピュラー音楽教育の可能性

昭和音楽大学准教授 白船 睦洋
昭和音楽大学短期大学部専任講師 森 篤史

はじめに

現在に至るまで、日本のポピュラー・ロックバンドなどのミュージシャンやアーティストの中で音楽大学を出ている人は、ほとんどいないと言ってよい。クラシック音楽の分野では、ピアノやヴァイオリンなどの器楽は幼少の頃より習い始めていることが多く、ソルフェージュ等の専門的音楽教育を受けていることも多い。しかしポピュラー音楽の分野では、比較的遅く中学や高校生の頃からスタートし、しかもほぼ独学で修得し、誰かに師事した経験すらないままにミュージシャンやアーティストとなっている例がほとんどと言ってよい。しかし近年、ポピュラー系の専門学校はかなりの数が開校されており、音楽大学でもポピュラー系のコースを持つところが増えてきた。

実際、ポピュラー音楽のミュージシャンは叩き上げで成長していく場合が多く、中高校生時代のバンド活動などを経て、卒業後にバンドやセッションを繰り返して少しずつ専門知識を得ながら仕事をし始め、プロミュージシャンになっていくというパターン、もしくはプロミュージシャンのローディーとして裏方でお手伝いをしながら勉強していき少しずつ仕事をし始めてプロミュージシャンへというパターンが多い。

しかし、ポピュラー系の音楽大学や専門学校が必要ないのか、と言えばそうではなく、最近ではその卒業生がミュージシャンやアーティストとなっている例が増えてきている。そこで短期音楽大学におけるポピュラー音楽教育を、専門教育機関以外の場合、専門学校の場合、4年制大学の場合などとの比較においてその可能性を考察していきたい。

1. 基礎力の徹底

本学に併設する4年制大学のジャズ・ポピュラー音楽コースでは、最初の2年間を基礎力の徹底に努めている。専門的な音楽教育を受けて来なかった学生に対して、正しいリズム感の習得、譜面の読み書き、音源からのフレーズコピーによる聴き取り力の向上、基礎的音楽理論と、その後のキャリアに及ぼす基礎能力の地固めをしているのである。短期大学においては、そのカリキュラムのほとんどが基礎力の徹底で構成されることになる。ポピュラー音楽は非常に幅広いジャンルで成り立っており、更にそれらのジャンルの融合によって新たなジャンルを形成していった歴史がある。このことから、ポピュラー音楽の創造は、そのほとんどが応用力であり、各ジャンルへの深い理解力を必要とする。そのためにも、学校で学べることは、まずは何と言っても基礎が中心になるのである。

2. レッスン

本学の主科実技レッスンはマンツーマンでの個人レッスン（60分）によって行われている。一方、専門学校等では少人数制のグループレッスンで行なわれている事が多い。時としてグループレッスンも効果的な場合があるが、グループ内の実力のレベル差が大きい場合には個別に対応しなくてはならず、効率が良くない。

また、専門的教育を受けない場合、やはり継続的な学習ができないためスキルアップの速度は鈍い。しかし、より多くの場数を踏むことにより、確実に実践的な能力が身に付いていく。

本学のジャズ・ポピュラー音楽コースではこれらを踏まえ、個人レッスンに加えて楽器ごとによるグループレッスンが週に1回ずつ用意されている。また担当する教員も可能な限り異なるようにしている。これはかなり手厚い教育体制であり、本コースの大きな特色である。毎週の課題をクリアし、成果を積み上げることにより、基礎力の徹底と続く応用力への足がかりとなるノウハウを提供している。

3. 理論系の授業

ポピュラー音楽に必要な音楽理論は、本来ならば1年間程の授業で充分基礎を習得することができる。音程、調号、音階の理解は「楽典」を学ぶことによって入学前に習得していることが望ましい。ジャズ・ポピュラー音楽コースの入試課題である「ポピュラー音楽理論」には、コードネームの読み書きについての設問もある。ただ、本コースは楽典による受験も選択できるため、仮にコードネームの読み書きについては入学後1年目に学び始めたとしても、2年間あれば基礎的な内容は習得可能である。

しかし専門的な教育を受けない独学の場合、やはり理解していくペースは遅いといえるであろう。専門学校においても2年間の授業を受ければ、基礎的な理論は習得可能であろう。

さらに、ポピュラー音楽の分野では演奏と理論が常に密接に繋がっており、実技系の授業においても、常に音楽理論の用語や概念はつきまとってくるため、必然的に理論系の授業以外の時間においても、何度か復習をしていることが多い。これは、クラシックと違いポピュラー音楽の譜面は、演奏すべき音符全てが記譜されているわけではなく、常に演奏する音を即興で「創造的」に演奏する能力が全パートに求められているためである。

この点からも、いかに理論と実技をバランス良く学んでいくかを本学のジャズ・ポピュラー音楽コースは課題としており、どんなレベルの学生であっても、2年間という短大の年数で最低限の基礎は身に付けさせて卒業させている。

4. 一般教養

ポピュラー音楽は商業音楽として広く一般社会に溶け込んでいる文化であり、その作

り手となる学生が一社会人として必要な一般教養を身に付けて社会に出ることは、ある意味音楽家になる以前に必要なことである。その上、昨今は契約や著作権についての知識も求められるため、高校を卒業したばかりの学生に対して、社会へ出る窓口としての役割を果たすべくフォローアップをしている。具体的には「音楽産業概論」という授業において、著作権ビジネスから昨今の音楽配信産業について、また外部から特別招聘講師による講義を交えて、広く一般社会へのアンテナを張る訓練の場としている。

専門学校では一般教養科目は無く、まさに専門分野のみを学ぶ場所となっている。また、専門的教育を受けない場合、英語等の一般教養は個人的に勉強しなくてはならない。しかし、実社会へいち早く出ることにより、挨拶や礼儀などを身に付ける機会により多く恵まれる。

5. 学部とのカリキュラム比較

本学のポピュラー音楽教育は、平成 15 年、短大に「ポピュラー音楽コース」を設置したのを皮切りに、その後平成 21 年、学部に「ジャズコース」、「ポピュラー音楽コース」を設置し、今年度大幅なカリキュラム改正を行った。その目的は、学部と短大との連携であり、長らく学部と短大で別で運用されてきたカリキュラムを細部に渡ってブラッシュアップし、更に来年度、いよいよ短大にもジャズコースを開設する運びとなった。これにより、学部と短大のカリキュラムの差は、「短大は基礎力、学部はその応用」と、より明確に差別化が計られるようになった。

しかし、学部で学べるのが短大で学べないのか、というと決してそうではなく、昨年度のカリキュラム改正により、学部のカリキュラムが程よく圧縮された形で短大のカリキュラムが用意されている。例えば、必修となる実技系科目は単純に 4 年間か 2 年間の違いがあるのだが、実践系科目であるライブやレコーディング等の科目数にも違いがある。また理論系の授業でも、基礎の部分では学部も短大も同じであるが、学部は更に作曲・編曲といった基礎理論の応用への道を残している。

6. 学部編入という進路

短大の学生が 2 年間通して学んだ後、更に続けて 2 年間学びたくなった場合において、学部編入という道が用意されている。これは本学の学短併設の強みであり、本学が短大として創設され、学部を併設するようになったときから、短大生を対象としたアピールポイントのひとつである。ジャズ・ポピュラー音楽コースの場合、短大からの編入は毎年数名程度おり、彼らは更に 2 年間大学に残りチャンスを窺う、というのが本音であると思われる。しかし、短大の 2 年間を通して芽が出なかった、ということは、学部編入はやはりある種の救済策とも考えられるのである。

7. 卒業後の年齢

ポピュラー音楽の分野において、ミュージシャンデビュー／レコードデビューをあるひとつの到達点とするならば、年齢が重要な要素となることは、現実問題、非常に重要視される。一般的に若者へ向けての音楽を供給する側があまりに高年齢だった場合、マーケティング的にはどうしてもハンデキャップとなることは否めない。また、大学、短期大学を卒業してからすぐに芽が出る可能性は決して高くないことを考えると、どうしても卒業してから数年間は下積み生活を余儀なくされ、地道な音楽活動を継続していく現実があり、その場合、大学と短期大学を比較したこの2年という年月の差は、後々に大きく響いてくることが予想される。多くのミュージシャンの場合、クラシックとは違い、幼少の頃から音楽の専門教育を受けてきた人はあまり多くはなく、学問としての音楽の基礎を2年間で徹底的に叩き込み、より実践の場である社会に出てから学び、成長して行くことが望まれる。

また短大卒業時の20歳という年齢は実践の場へ出る良いタイミングの年齢であると考えられる。

2014年2月12日にCDデビューしたシンガーソングライター「Saku」は昨年度、短大ポピュラー音楽コースを卒業したアーティストで、本コースの良いモデルケースとなっている。入学時からある種の魅力は備えてはいたが、やはり理論や発声など、基礎的な学習を在学中に修め、さらに学内のみならず外部での活動も積極的に取り組んでいたため現在の活躍に繋がっており、2年間という短い時間の中で集中して取り組むことにより、若い年齢でのデビューに繋がっている。“キュートで華奢”とPRされ売り出されており、実際プロフィールには生年月日が明記され、そのイメージも年齢と無関係ではない。

まとめ

短期大学におけるポピュラー音楽教育はまだまだ始まったばかりである。社会全体にこの教育システムがうまく機能していることが認知されるには、当然卒業生の活躍が期待される場所である。本コースも10期生の卒業生を輩出し、何人かのプロミュージシャンやアーティストが誕生したが、卒業生全員がプロになれているわけではない。しかし、彼らがポピュラー音楽を学んだことを通して、社会や産業と密接に関わるようになったときに、ポピュラー音楽の特徴でもある、創造性と全世界的な視野を持つことはいずれ役に立つであろう。また、短大の2年間という期間が長期的に、内容的にプロへの最短距離となるであろうことを実践しながら、成果を出す事により検証していく必要があると考える。